

第六号に寄せて

吉見 孝夫

前号から半年を経て第六号をお届けすることができました。年二回発行が慣行となるよう努めます。今号の二本は、ともにイソップ寓話を引用した文献の整理です。今村氏のものは戦後の中学校国語教科書すべてに目を通したうえでの論考です。その労を多としていただきましたと存じます。

九州帝国大学教授長沼賢海が「伊曾保物語絵巻」(『史淵』第二号、一九三〇年一二月。『日本文化史の研究』(教育研究会、一九三七年七月)に再録)という論文で紹介した絵巻物の「伊曾保物語」があります。当時福岡県新宮町在住の堺豊三郎という方が所有していました。現在の所在を何とか知りたいと願っておりましたところ、偶然に宗教法人新健康協会に付属する晴明会館(福岡市)の所蔵となつていることを知りました。本資料の本文は仮名草子『伊曾保物語』を引用するものですので、本文研究のうえで高い価値を有するとは思えません。一方、その絵は、万治整版本の挿絵とは異なり、舞台を唐風にして細密に彩色が施されています。美術史的な意義を云々する資格はありませんが、長沼論文やインターネット上の写真を見た限りでは十分に鑑賞に堪える絵画で

す。同協会からは調査の許可をいただいておりますが、当面私自身で調べる予定はありません。どなたかにお調べいただきたいと望んでおります。

第五号にも貴重なご教示を賜りました。ご指摘くださった方々には深く感謝申し上げます。中務哲郎氏から、五一画(二八、二九ページ)はヘロドトス『歴史』巻二・一二一の「ランプシニトス王の宝蔵」を引いているのだらうとお教えいただきました。中務氏の、岩波「書物誕生―あたらしい古典入門」シリーズの『ヘロドトス『歴史』―世界の均衡を描く』(岩波書店、二〇一〇年八月)の七〇〜七四ページに、インドから我が『今昔物語集』までを視野に入れた、この話の解説があります。

中務氏、檜枝陽一郎氏からは六三画(三六、三七ページ)に第一マカバイ書八章が引かれていることのご指摘を受けました。檜枝氏は中世オランダ語の専門家で、『中世オランダ語狐の叙事詩』『ライナールト物語』『狐ライナールト物語』(言叢社、二〇一二年一〇月)という翻訳書(というよりも、詳細な註解の付いた研究書)を公にされています。こういった専門家を前にして前号を出したのですから、己の厚顔、蛮勇に自ら驚いていま

す。

檜枝氏からは Dr. Maurits Sabbe, *Dierkenis en Diersage bij Vondel*. Antwerpen 1917 (フォンデルにおける動物理解と動物伝説) という文献を紹介していただきました。

これを研究に活かす能力のないのを遺憾とします。

細心の注意を以て読んでくださる方々の存在が、有り難くもまた怖くもあります。一一六画がイソップ寓話のどれに当たるか不明としたところ(一九ページ)、遠藤潤一氏、花間隆氏から疑問が呈されました。Charles Stickney 本の *The Ass Eating Thistles* に当たるとの(一)指摘です。遠藤氏からは古く一八一八年の Thomas Bewick 本にもあると教えていただきました。花間氏からは、一八詩(二二、二三ページ)、五一画(二八、二九ページ)、六一詩(三〇、三一ページ)、六二画(三二、三三ページ)についても示唆をいただきました。

過分な励ましの言葉をお送りくださった方々にも感謝申しあげます。